

大仏餅。袴着の祝。新まへの盲目乞食

三遊亭円朝

青空文庫

このたびはソノ三題話の流行つた時分に出来ました落語で、第一が大仏餅、次が袴着の祝、乞食、と云ふ三題話を、掲載することに致しました。

場所は山下の雁鍋の少し先に、曲る横丁があります。彼の辺に明治の初年まで遺つて居つた、大仏餅と云ふ餅屋がありました。余り美味しくはございませんが、東京見物に来る他県の方々が、故郷へ土産に持つて往つたものと見えます。其大仏餅屋の一軒おいて隣家が、表が細い梅の面取りの出格子になつて居りまして六尺、隣りの方が粗い格子で其又側が九尺ばかりチヨイと板塀になつて居る、無職業家でございませう。表には河合金兵衛といふ標札が打つてござります。マア金貸でもして居るか、と想像致されませう。丁度明治三年の十一月の十五日、霏々と日暮から降り出して来ました雪が、追々と積りまして、末には最う「初雪やせめて雀の三里まで」どころではない雀が首つたけになるほど雪が積りました。其時に俄盲目の乞食と見えまして、細竹の突起を突いて年齢の頃は彼は五十四五でもあらうかといふ男、見る影もない襤褸の扮装で、何うして負傷を致しましたか、尻を端折つて居る膝の所からだら／＼血が流れて居ります。ト属いて来ましたる子供が、五歳か六歳位で色白の、

一二重瞼ふたへまぶたの可愛らしい子でございませうが、生来はらからの乞食こじきでもありませんまいが、世の中
 の開明かimeiに伴つれて、前ぜん、贅沢ぜいさく生計せいけいをなすつたお方かたといふものは、何どうも零落おちぶれ易やすいもので
 親父おやぢの膝ひざから、血ちが流ながれるのを視みて、子こ「お父とつちやん痛いたいかえ、お父とつちやん痛いたいかえ。父
 「アイそれは痛いたいワ……負傷けがをしたんだから……エー最もう新入しんまいの乞食こじきだからの、何ど処どこが
 何どうだかさつぱり訳わけが解わからないが、彼あの山や下ましたの突つき当あたりの角かどの所ところに大勢おほせい乞食こじきが居ゐて、
 何故なぜおれたちの縄張なはばりの家うちを貫もらつて歩あく、其そ処ところは己おれの方ほうで沙汰さたをしなければ、貫もらふところ
 ない、といふから、私わたしは新入しんまいの乞食こじきで何なんにも存ぞんじませぬ、と云いふのを、大勢おほせい寄よつて
 集たかつて己おれを三さんつも四よつも打ぶち倒のめしアがつて、揚句あげくのはてに突飛つきとばされたが、悪わるいところに
 石いしがあつたので、膝ひざを摺剥すりむいて血ちが大層たいそう出でるからう……。子こ「お父とつちやん血ちが大層たいそう
 出でるよ。父ちち「アー大層たいそう出でるか。子こ「アー大層たいそう流ながれるからね……。あのね坊ぼうが摩さすつて上あ
 げようか。父ちち「まアまア何なにしろ斯こう歇やみなしに雪ゆきが降ふつては為しかたがない、此家このの檐のきした下したを
 拝はい借やくしようか……エー最もう日ひが暮くれたからな、尚なほ一いち倍ばい北風きたかぜが身みに染しむやうだ、
 坊ぼうは寒さむくはないか。子こ「あいお父とつちやん、坊ぼうは寒さむくはないけれども、お父とつちやんが痛いたから
 うと思おもつて……。父ちち「ン、ンー能よく勞いたはつて呉くれるの。子こ「お父とつちやん摩さすつて上あげようか。
 父ちち「ンー摩さすつて呉くれ。子こ「此この処ところかえ……。父ちち「あゝ……。有あり難がたうよ……。何どうもピ

りく痛んで堪らない……深く切つたと見えて血が止まらない……モシ少々お願ひがございますがな、お軒下を少々拝借致します……就きまして私は新入の乞食でございまして唯今其処で転びましてな、足を摺破しまして血が出て困りますが、お慈悲に何卒お煙草の粉末でも少々頂きたいもので……エーく粉末で宜いのでございますがな。此家では賓客の帰つた後と見えまして、主人が店を片付けさせて指図致して居りますところへ、表から声を掛けますから、主「何んだ……お美那や何者が表で言つてるぜ。みなにね新入の乞食が参りまして、ソノ負傷をしたからお煙草の粉末を頂きたいつて……。主「然うか、乞食か……待ちなく、今乃公が見て遣るから……。と雨戸を引いて外の格子をがらがらツと明けまして燈明を差出して見ると、見る影もない汚穢い乞食の老爺が、膝の下からダラ／＼血の出る所を押へて居ると、僅か五歳か六歳ぐらゐの乞食の児が、紅葉のやうな可愛らしい手を出して、父親の足を摩つて居ります。

主「おゝく……お美那、可愛想ぢやアないか……見なよ……。人品の好い可愛らしい子供だが、生来からの乞食でもあるまいがの……あれまア親父が負傷をしたといふので彼の可愛らしい手を出して膝の下を撫て遣つて居る、あゝく可愛い児だ、今のう良い薬を遣るよ、……。煙草の粉末ぢやア却つて可けない、良い薬が有るから……。お美那や其粉

薬を出して遣んな……此薬は他にない能く効く薬だからな……血止めには善く効くし、
 直ぐに痛が去るから、此薬を遣るから此方へ足を出しな。乞「はいく、有難うございま
 す、誠にお檐下を拝借するばかりでも、私は有難いと存じますのに、又々お強
 請申して、お煙草の粉末を願ひましたところ、却つてお薬を下されまして、はい有難う
 存じます、誠にとんだ負傷を致しまして……何うも相済みませぬことでございます、お蔭
 様で父子の者が助かります、はいく……。主「さア、此薬をおつけ……此薬はな鎧
 の袖というて、なかく売買にない良い薬だ……ちよいと其処へ足をお出し、撒けて遣
 るから……。乞「はいく、有難う存じます。主「それく……。染みるか、……。あと、余つ
 たのをお前に上げるから此薬を持つてお帰り。乞「はいく。主「エー、血が大層流
 れるが、手拭で縛らなければ可けない。乞「はいく。主「手拭は無いか、……。無け
 れば遣る……これく、古手拭を出して遣んな、……。ソレ此手拭で縛るが宜い、アレサ
 う裂かなくつても宜いやな、……。無ければ復た古い手拭を遣るよ……。乞「はいく、有
 難う存じます。

俄盲目で感が悪るいけれども、貰つた手拭で傷を二重ばかり巻いて、ギユツと堅く
 緊めますと、薬の効能か疼痛がバツタリ止まりました。乞「旦那様、誠にまア結構

な薬でございませす、有難う存じます、疼痛がバツタリ去りましてございませす。主「それは去るよ、極く効く薬だもの……其の子はお前の子かえ。」

乞「はい悴でございませす。主「幾歳になる。乞「はい六歳になります。主「六歳か……吾家の子供は、袴着の祝日で今日は賓客を招んで、八百膳の料理で御馳走したが、ヤア彼れが忌嫌だの是が忌嫌だのと、我意ばかり云ふのに、僅か六歳でありながら親孝行に、まア此寒いのに可愛い手で足を撫て、遣るところは何うだえ、……可愛想だなー、……彼の残余つた料理があつたツけ……賓客の残した料理が皿の内に取つてあるだらう、……アーそれさ、……乃公の家で今日は小供の袴着の祝宴があつて、今賓客が帰つたが少しばかり料理の残余つたものがあるが、それをお前に上げたいから、なにか麴桶か何かあるか、……麴桶があるなら出しな。乞「はい、まア結構なお薬を頂くのみならず、お料理の残余物まで下され、有難う存じます、左様ならこれへ頂戴致しますと、襪褌手拭へ包んであつた麴桶を取り出して、河合金兵衛の前へ突出すのを、金兵衛手に取つて見ますると、遠州所持の南蛮砂張の建水でございませす。主「まアお前結構な建水だが此建水をお前は、何か麴桶の代りに使ふのか。乞「はい最う何にも彼も売り尽しましたが、此品は私の秘蔵でございませすから、此品だけは何うも売却すこと

が忌嫌いやでございますから、只ただ今もつて麴めんつう桶づが代りに傍そば離はなさずに使をつて居をります。主
 「ン、これは恐おそれ入いつたね、お前まへはお茶ちや人じんだね、あゝこれゝ彼の悪あい膳ぜんに、……向むか
 う付づけ着のこが残余あつて居あるのを附つけて、お汁しるを附つけてチヨツと会くわい席せき風ふうにして……乃わし公もね
 茶道ちやが嗜すきだからね、お前まえが何どうも麴めん桶づが代りに砂すばり張はりの建みづこほし水みづを持もつて居あるので感あ心し
 たから、残余ありもの参さん州しゅう味み噌そうのお汁じゆもあるから、チヨツと膳ぜんで御ご飯ぜんを上げたい、さア
 家内うちへ上あがつてね、何なにもないホンの残余ありもの御ご飯ぜんも喫たべて下ください、さア此こ処とほへお入はいり……
 乞こ「へいゝゝ……何どう致いたしまして、此こ通とほり穢きたなうございますから……。主ま「まア宜いいよゝ
 ……此こ処こゝを明あけて置おいては、雪ゆきが吹ふつ込こむから疾はやく此こ処こゝへお入はいり、……乃わし公が寒ひやいから
 ……。乞こ「へいゝゝ有ありがた存ぞんじます、何どうも折せ角かくのお厚な情さけでございますから、御ご遠えん
 慮よ申まう上あませぬでお言こと葉はに従したがつて、御ご免めんを蒙かうむります。主ま「どうもお人ひと品がらなことだ、
 違ちがふのう……さアゝ此こ方こゝへお入はいり。乞こ「へいゝゝ。主ま「足あしが汚よごれて居あるな……これゝ
 ……徳とく次じ郎らうゝ。徳とく「はい。主ま「此こ処こゝへ来きての、此こ乞こ食じきの足あしを洗あつて遣やれ。徳とく「乞こ食じきの
 足あし……ンゝゝ。主ま「何なにを云いつて居ある、当いま時まは事ゆゑ由ゆあつて零おち落ちれてお出いでなざるが、
 以もと前りつは立りつ派ぱな方かたで、土し族ぞくさんだか何なんだか知しれないんだよ、大だい事じにしてお上あげ、陰いん徳とくに
 なるから。徳とく「(小こ声こゑ) 陰いん徳とくでも乞こ食じきの足あしを洗あふのは忌嫌いやでございますなア。とグヅノ

云ひながら、忌嫌々々足を洗つて遣る。乞食は頻りに礼を云ひながら雑巾で足を拭ひ、
 漸うくゝの事で板の間へ坐つて、乞「どうも何から何までお厚情に預かりまして、有難
 う存じます。主「これく膳を持つて来な……お汁を熱くして遣るが宜い……さアくお
 喫べく、剰余物ではあるが、此品は八百膳の料理だから、そんなに不味いことはない、
 お喫りく。乞「へいく有難う存じます……（泣きながら俵に向つて）まア八百膳の
 御料理なぞを戴きますといふのは、是はお前なんぞはのう、喫べ初めの喫べ納めだ、斯う
 いふお慈悲深い旦那様がおありなさるから、八百膳の料理を無宿者に下されるのだ、お
 礼を申して戴けよ、お膳で戴くことは、最う汝生涯出来なれど。子「あい……旦那
 様お有難うございます。と可愛らしい手を突いて、頸を横にして挨拶をします挙動
 が手の突きやうから、辞儀の仕方がなかく、叮嚀でげす。主「ン……お前様も何ん
 だらうね……。乞「へいく。主「以前は然るべきお方の成れの果で、まア此時節が斯
 う変つたから、当時然ういふ御身分に零落れなさつたのだらうが、何うもお気の毒なこと
 で……。乞「はい旦那様私も、賓客を招ぶ時には八百膳の仕出を取寄せまして、今日の向
 付肴が甘酢の加減が甘味過ぎたとか、汁が濃過ぎたとか、溜漬が辛過ぎたとか小言
 を云つた身分でございますが、当時罰が中つて斯ういふ身分に零落れ、俄盲目になりま

した、可愛想なのは此子供でございます、何んにも存じませぬで、親の因果が子に
 りまして、此雪の降る中を跣足で歩きまして、私が負傷を致しますとお父さん痛うな
 いかと云つて勞つて呉れます、私の心得違ひから斯様に零落を致し、目まで潰れまして、
 ソノ何んにも知らぬ頑是のない忤に、斯う難義をさせますかと思ひますれば、誠にお恥
 かしいこととございます。主「それはくお氣の毒なことだ、貴方は以前はお旗下かね。
 乞「いえく。主「ノー……南蛮砂張の建水は、是品は遠州の箱書ではないか
 え。乞「へい……能う御存じさまでございます、これは貴方、遠州所持でございまして、
 そのちたい偉い宗匠さんが用ひたといふ品でございます。主「ノー……。乞「これ
 其後大した偉い宗匠さんが用ひたといふ品でございます。主「ノー……。乞「これ
 わたくしだいじしなは私の大事な品でございまして、当時斯う零落れまして、値を高く買はうといふ人がござ
 いますけれども、なかく手離しませぬで……。主「どうもマア、乞食になつても砂張の
 建水をすてないといふところは、真のお茶道人でげすな、お流儀は……乞「へい千家で
 ございます。主「誰方の御門人で……。乞「はい実は……川上宗治の弟子でございま
 す。主「フーン……お姓名は聴いても仰やるまいね。乞「へいくもう姓名を申すのは、
 お恥かしくて申せませぬが、斯様に御親切に上へ上げて、御飯まで下さる貴方様のこ
 とでございますから、隠さず申上げますが、私は芝片門前に居りました、神谷幸右衛

門でございませす。主「へえー……何にかえ、貴方は神幸といふ立派な御用達で大した
 お生計をなすつたお方か……えーまあどうも思ひ掛けないことだねえ、貴方の家宅の三疊
 大目の、お数寄屋が出来た時に、お席開きといふので、私もお招きに預つたが、其時
 は是非伊豆屋さんなんぞと一緒に、参席る積りでございませす。残念な事には退引き
 ならぬ要事があつて、到頭参席りませぬでしたが……。乞「へい〜貴方は誰方様で
 ……。主「私アお徒士町に居つた、河内屋金兵衛でげすよ。乞「へえー……河内屋さん
 ……エーまあ道理こそ、此砂張の建水がお目に留まるといふのは、余程お嗜好者とは存じ
 ましたが……。貴方は河内屋さんでございませすか……。思ひ掛けないことで……。主「どう
 も誠に思ひ掛けないことでお前さんに邂逅ました、未だお目には掛からなかつたが、今度
 はお昵近にならう……。まあ此時節が變つて貴方は斯う御零落になつて、何んとも云
 ひやうがない、拙者はマアどうやら斯うやら、斯うやつて居りますが本当においとし
 いことだ……。妻「お噂には毎度承はつて居りましたよ、立派なお住宅でお庭は斯う、何は
 斯うと、能くまア、何んでございませすよ、名草屋の金七といふ道具屋が参りまして始終お
 噂でございませすよ。乞「へい然うでございませすか。主「まあ〜おいとしいことござい
 ませす……。時に一寸お薄茶を上げやう鉄瓶点て〜……コレ〜其棗で宜い、出て居

るんで宜いから持つてお出で……一服鉄瓶点てゞ上げませう、茶は挽きたてだけれども、
 何うも湯加減が悪いのでうまく出来ないが、一服上げる。乞「どうも誠に有難うござい
 ます、私は最う一生涯、お薄茶一服でも戴けることでないと、断念めて居りましたと
 ころが（泣声）鉄瓶点てゞ一服下さるとは……往昔の友誼をお忘れなく御親切に……
 わたくしも私是最う死んでも宜うございます。主「然う仰やられては実に胸が一杯になります……
 お菓子か何かあるだらう……最う皆な賓客に持たして遣つてしまつたか……困つたなア……
 ……何かないかなア……シー一軒おいて隣家の大仏餅でも宜い、仕方がない……宜しく此
 餅を皆皿に積んでの……さア何うか不味ない物だが子供衆に皆な上げて下さい。
 乞「どうも有難う存じます……左様なら御遠慮なしに頂戴致しますと、亭主
 の河合金兵衛が茶を点つてる間に、小井を前に引寄せて乞食ながらも、以前は名のあ
 る神谷幸右衛門、懐中から塵紙を出して四つに折つて揚子箸で手探りで、漸うく餅
 を挟んで塵紙の上へ載せて悴幸之助へ渡して自分も一つ取つて、乞「有難う存じま
 す……大仏餅と申すものは雅が有りました、お茶受けには結構なお菓子でございま
 す……どうも思ひ掛けないことで……とオロ／＼泣きながら、口の中でムク／＼嚙んで
 居りましたが、お茶がプツと出て来たから、グツと嚙込むと餅が咽喉へ問へた。幸「（苦

悶もん）グツくく。主「おやくく何どうかなすツたか。幸「（苦悶くもん）グツくく……モ、
 餅もちが……。主「餅もちが問つかへたか……。さア大たい変へんだ……。泣なきながら喫たべるから問つかへるのだ困
 つたものだ……。お待ちなさい……。此このこ子が心配する……。私わしが脊せを叩たたいて上あげる……。宜よいかい
 ……失しつ礼れいだが叩たたきますよ。と握にぎり拳こぶしで二度叩たたくと、グツと餅もちが通とほつたが鼻しやうじの障しやうじ子こが抜ぬ
 けてしまつた。乞こ「フガくく……。有はひ難はほうほほぎいます有はひ難はほうほほぎいます、餅もちが通とほりまし
 た。主「餅もちが通とほつたか……。おやくく貴あなた方なたの目めが明あきましたな。乞こ「目めが明あひましたが、鼻はな
 が斯くんなになりました。主「何どうしたんだ……。どうく……。ハハア解わかつた今いま食まつた餅もちが、
 大だい仏ぶつ餅もちだから、目めから鼻はなへ抜ぬけたのだ。

（捩納谷直次郎速記）

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

大仏餅。袴着の祝。新まへの盲目乞食

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>